

作詞

ヤビと瓶

ズボンを下ろし、すかさず上げる。その動作を高速で繰り返ししていると、いつからか裏地と皮膚の間には小さなワームホールが形成され、そいつは次第に大きくなっていった。

徐々に、ズボンを上げたままでもいいという気持ちが強くなったので、通算百一回目の「ズボンピタット上ガットルーネ」状態で一度、手を止める。既に半径五メートル程にまで巨大化していたワームホールだったが、次の瞬間、その中からのそりと一頭のトリケラトプスが姿を現した。一億五〇万から六六〇〇万年前、白亜紀後期――。神さまとは厄介な真似をしやがるもので、運命か必然か、穴はその時代の地球へと繋がったらしい。

トリケラトプスは僕のズボンの中で、頭をブルブルと左右に振り始める。微笑ましく見守る僕だったが、次の瞬間、鋭利なそのツノが僕のおちんこに直撃した。ワームホールが開き、彼オア彼女がその自慢のツノを光らせ登場したその時から、思えばおちんこが破壊される見当はついていたのだ。だから覚悟はしていた。でもとても痛かった。あまりに尋常でない痛みに、僕は僕のおちんこことのこれまでのトイレでの思い出と、母の姿を想起し

た。

「キヤアアアアアアアア」

ふと、女性の甲高い悲鳴が聞こえたので、なんだなんだと顔を上げると、はて、そこに広がっていたのは東京ドームの観客席（満員御礼！）の景色だった。

そこで、僕はすべてを思い出した――。僕は世界が誇るシンガー「神椿 光（かみつばき ひかる）」であり、今日は東京ドームでの久々の日本公演の日であった。そして今は本番中で、僕が両足を乗せるこの地はほかでもない、東京ドームのステージなのだ。日々の強いストレスが崇つて、途中で歌うのをやめた僕は、約五万人の観客を前にして無意識に、ズボンの上げ下げ運動を始めていたようだった。

しかし……どうして今になって悲鳴が上がるのだ？ 百一回もズボンを上げたり下げたりしていたのだから、その間、誰かが僕という変態に怯えて叫び声を出しても、よかったではないか。

不服の面持ちでいると、下半身の違和感がどんどん拡大していく感覚があり、おやおやと思つて、そちらへ目をやる。すると、股間からズボン越しに染みわたる鮮血が、四方八方に噴射していた。血は観客へ豪雨のごとく降り注ぎ、みんな必死に逃げ惑っている。同時に、場内アナウンスで避難指示も為され始めていた。おちんこも

破壊されちゃったし、広いステージの上で、僕だけが孤独だった。

だけど、次の瞬間、僕は唐突に天から、神さまから、授かり言を受けたのだ――。

『ズボンに……ズボンに目を向けなさい……』

その言葉通りにズボンを見て、僕は思わず「ファ!!!」と大きく声を上げる。ズボンはトリケラトプスがそこにいることで、今まで見たことがないくらいパンパンに膨れ上がっていたのだが、それでも膨れ上がっているだけで、驚異の耐久性により破れぬままだのである。幼少期、コンクリートの上で転んでもズボンは無事で、その下の膝小僧だけが怪我していた時のことを思い出す。きっと、ズボンというものは僕が思うよりも数倍頑丈なのだ。

ということとは、だ――。観客は僕の股間から鮮血が噴射した事実は知っていても、膨れたズボンの中にトリケラトプスがいて、おちんこが破壊されたことはまだ知らない。観客からすれば、ただただズボンが肥大化したというだけのお話し。

つまり観客は、僕の股間に、まだおちんこがあると思っ
っている!!!??!!??

すなわち、観客が僕のおちんこを「あるもの」として

観測すれば、時空が歪んで、僕は再び現実でおちんこと
再会できるかもし、れなヒ!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!

しかし、みんな既に避難を始めていて、もはや会場から退散する寸前であった。僕の股間はおろか、誰も僕の姿すら見てくれない。今ここで振り向いてもらえなければ、僕は永久におちんこと会うことはできないだろう。だから僕は歌うことにした。みんなの気を再び引くためだ。僕は地面に転がっていたマイクを手に取り、ゆっくりと詞を紡ぎ始めた。

ズボン

詞 神椿 光〇

それはまるで鋼鉄のようにかたく

それはまるで子犬のようにカジュアル

うわ、ズボン屋さんもびつくり!

ビッグボーイとコスをはしごした後のお腹みたいにな

はちきれそうでも、破れないぜ!

上げて 下げて 上げて下げて上げて

赤下げないで 白下げる
黄色はないが 白上げる
これはズボンでなく 旗のお話し

云うことないが 何か云う
インパクト重視の下ネタに 頼り切りね
本当に歌いたいことなんて はて ないのにね
でもおもしろい ソー おもしろい
本当に？